

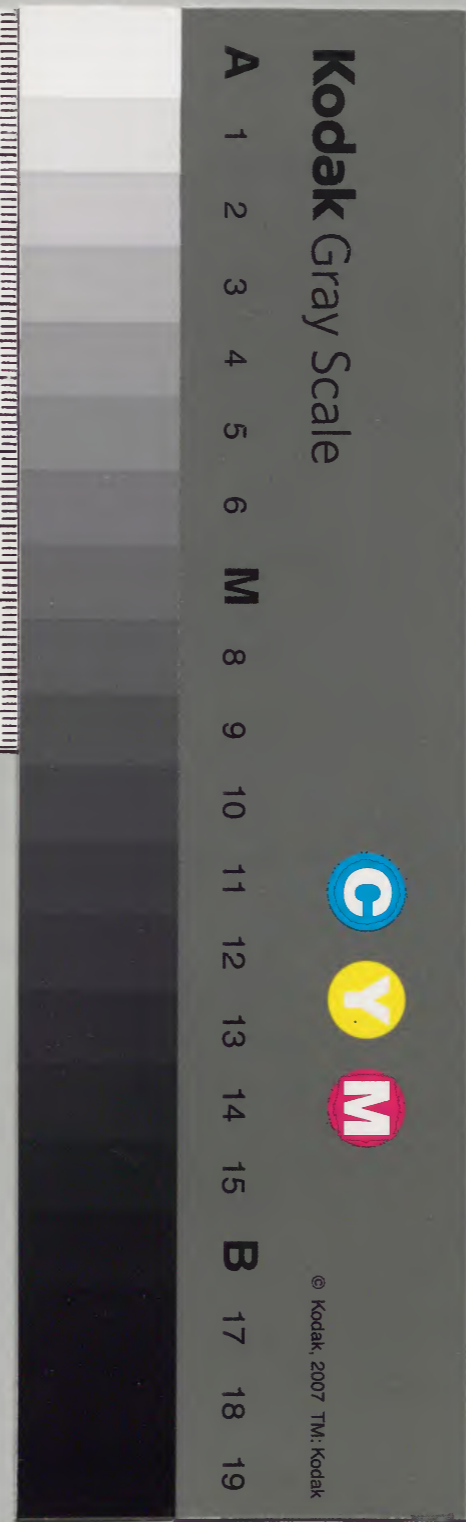
日本書紀傳

三卷 天

和
一〇五二二號

內閣文庫
 第一二六三號
 書部
 第一六二函
 共四百七十七冊

內閣文庫	
番號	和 10522
冊數	156 (10)
函號	特 85 1



教部省
文庫印

皇國書
文庫印

青政官
文庫

日本書紀傳三之卷

神代上第一

神世七代章

穗積重胤

謹撰

古天地未剖陰陽不分渾沌如

雞子溟滓而含牙及其清陽者

薄靡而爲天重濁者淹滯而爲

地精妙也合搏易重濁之凝場

○日本書紀傳三

〇一

難故天先成而地後定然後神
聖生其中焉故曰天地開闢之
初洲壤浮漂譬猶游魚之浮水
上也于時天地之中生一物狀
如葦牙便化為神號國常立尊

至貴曰尊自餘曰命並
訓美舉等也下皆微此
槌尊次豐斟淳尊允三神矣乾
道獨化所以成此純男

御紀三十卷の中首二卷有り此と神代上下と云
事本文小所見たり如く此神代上下卷小段落九
九章有り一と神世七代章二と八洲起元章三と四神
出生章四と瑞珠盟約章五と寶鏡開始章六と寶劍出

皇紀

現章七と天孫降臨章八と海宮遊行章九と神皇承運章と云々此稱何れ。御代か如何ある入の號たり。今詳ありすと雖も此紀を讀むに甚便理宜ければ今も從て用ふ猶巨細別してしむ。何章あり成りけし。正書を章首に立て一書に其下を諫て別章と成。此を神世七代章と云ハ此章の終ハ自國常立尊迄伊弉諾尊伊弉册尊是謂神世七代者矣と百を取れり者あり。諸古事記ハ先ハ別天神五柱の傳を擧て次ハ神世七代の神等を載られたり。御紀ハ一書。傳ハ所ニ別天神の御名と擧り。正書ハ唯御事述を耳記とせ。御名と彰ハこれぞ

國土の成り始を主と立り御紀の趣意あり。故ハ國常立尊を其首に立り。古事記ハ古傳の任の事を記し。御紀ハ同ト古傳の任の初發より。云ハ史記を定め成り。故ハ別天神の御事。ハ客ハ國土の事を主と爲り。御心。題號を日本書紀と云ハ。著り。唯西番の對。ハ耳ハ釋紀問題ハ問。此書名日本書紀其意如何。答師說依註日本國帝王事謂之日本書紀。延喜講記發題曰問。此書号日本書紀如何。說云書本朝事故云。有ハ。ハ。對ハ。非ハ。思ハ。但。後ハ。日本文德天皇實錄日本三代實錄。古天地未剖。陰陽不分。然後神聖生其中焉。と云迄の文ハ別天神の御名を省きて其御事述を以て傳へたり。古語ハ。然れども三五曆記及淮南子春秋緯云ハ漢籍ハ依て

文を成せざる故に人皆我の古説小非りか如く思ふ
めり固陋あり事あり元て御紀の中ふる古傳共小
以も彼小似寄れ事有れば當否ハ姑く措て彼文を
擬用りし事常あり難む可小非ず然れども彼と
此と風土素より別あり相合ざる事多り強て
合せたる其意を以て辨別す有べし
三五曆
古昔天地未分渾沌如雞子萬八千歲天地開闢日甲子
歲甲寅清輕者上爲天濁重者下爲地盤古在其中神於
天聖於地萬八千歲天極高地極深最起於一立於三成
於五盛於七處於九云と見え淮南子天文訓ハ天
陸未形馮翼洞瀆故曰大昭道始於虛鄂虛鄂
生宇宙宇宙生氣有漢垠清陽者薄靡而爲天重濁者
凝滯而爲地清妙之合身易重濁之凝濁難故天先成而
地後定天地之襲精爲陰陽陰陽之專精爲四時四時之

敬精爲万物と有り專易の專字を一作傳と有り此二
漢土の天地の古説あり此を取て文を成とん
事之も更あり又三墳の古言以て傳たれ古傳ハ彼文
小密中者又三墳の古言以て傳たれ古傳ハ彼文
遊神木靈五色未分中有其物眞ニ而性存謂之混沌混
沌爲太始太始者元胎之萌也太始之數一爲太極太
極者天地之父也云と有り
此餘り此意味あり語多し
諸此傳ハ別天神の御
事迹ありと云故ハ古天地未剖陰陽不傳と有り一章
書第五小天地未生之時と云時天地質ハ陰陽氣も未
形ハ第以前第又一書第四小高天原所生神名曰天
御中主尊次高皇產靈尊次神皇產靈尊と有り其時の
狀と云事次小説ハ如ク若て天御中主尊ハ未剖不
分ハ物初ハ剖分ハ氣勢イキガシの屈伸ハ就て高皇

産靈尊神皇産靈尊と夫妻ニ柱神等共タテマツリ俱生坐タテマツリて陸
 陽の氣初ハツて相分れハツり相結ハツばり天地と成ナリべし混
 沌ハツたり物と産ハツせり迄ハツを合ハツめたり事文の續ハツもハツ著明
ハツ此時ハツ高天原と云ハツ後ハツ天日ハツを指ハツめたりハツ異
ハツ唯ハツ産靈ハツと云ハツ事ハツ第ハツ四ハツ一書ハツの傳ハツの註ハツすハツ如
 次ハツ小渾沌如ハツ雞子溟滓而含ハツ牙ハツと有ハツ第三ハツ一書ハツ小天
 地混成之時始有ハツ神人焉號可美彦ハツ尊ハツと有ハツ同ハツトハツ
ハツ一ハツて其含ハツ牙ハツと云ハツ物即葦牙ハツあり者ありハツ牙ハツを伎ハツ邦ハツ志
ハツと云ハツ事ハツ少ハツ氣ハツと質ハツと相分ハツりハツ少ハツ一ハツ第ハツ次ハツ小其清
ハツ四第ハツ六ハツのハツ一書ハツ小天地初判ハツと有ハツ是ハツありハツ
 陽者薄靡而為ハツ天重濁者淹滯而為ハツ地云ハツ故天先成而
 地後定ハツと有ハツ第六ハツ一書ハツ小天地初判有ハツ物若葦牙ハツ生ハツ於

空中因此化神號天常立尊云ハツ又有物若浮膏生ハツ於空
 中因此化神號國常立尊ハツと有ハツ當此ハツ文ハツありハツ此ハツ於
ハツ初立ハツの時ハツと云ハツ右ハツ少ハツ別天神の御事迹ハツハハツ至ハツ少ハツ盡ハツせ
ハツハハツ成ハツ此ハツ中ハツ小國常立尊ハツ御事迹ハツ也ハツ含ハツりハツ有ハツ事ハツありハツ也
ハツ也ハツ地ハツハハツ天ハツ少ハツりハツ甚ハツくハツ後ハツれハツ成ハツ此ハツ故ハツ小文ハツと割ハツてハツ次
ハツ小故ハツ曰ハツと云ハツ同ハツトハツ狀ハツありハツ事ハツと重ハツなりハツ復ハツさハツひハツ云ハツ者
ハツと所思ハツ然ハツと釋ハツ紀ハツ小日本書紀三十卷ハツと有ハツ細書
ハツ小無序ハツ但師說初文天先成而地後定ハツ然後神聖生其中
ハツ焉ハツ已ハツ上ハツ者ハツ序文ハツと有ハツ右ハツの文ハツを得ハツりハツ讀ハツ解ハツりハツりハツ
ハツ言出ハツたりハツ臆度ハツの說ハツありハツ印ハツ本ハツハハツ無序ハツのハツ二字ハツ細字ハツのハツ研ハツりハツも

違へれば今ハ一本ハ依て
共ハ連けし細書トハ爲り
古ハ往々方ハて昔ト同
ト共ハ當今ハ對ヘテ語あり中ハ昔の方ハ殊ハ我
身ハ親ハ近ク古ハ廣クして遠ク意味有ク昔ハ向
あり故ハ身ハ親ハ云事あり神武天皇御紀ハ昔我
天神高皇產靈尊大日靈尊云々と宣い下ハ昔伊弉
諾尊目此國曰云々と有るハ古トハ云
トト決て昔ト云べし所ありと思へ
第一一書ハ
也古國雅地雅之時と見えたり共ハ久代と廣ク指
あり寶鏡開始章第三一書ハ此太古之遺法也と見え
孝徳天皇御紀ハ古道と云ひ餘りも古某と云語多ク
リ万葉一十一ハ古昔母然ル有許曾と云て現身ハ
對ヘたり古語拾遺ハ蓋聞上古之世未有文字貴賤先
古口ト相傳前言往行存而不忘書契以來不

好談古ト有ハ其上セト然レバ此ハ天地の成立ハ當
以て古トハ云りあり
今ハ其未生ハ上セの事と云爲ハ古云トハ
言出たり者あり天地未剖と云ハ天ハ天日と云ハ
地ハ國土ハ事誰も知リ如クあり此ハ世界一般
の始あり天日と國土とニめてハ猶盡さず此ハ因
て思ふハ天表ハ在り星宿ハ共ハ天ハ天日の外
圍ハ在り五星及月輪ハ皆ガ地ハ所屬あり者あり
此ハ餘りハ鑿り過たり説ハ如クハ有れども天地
の成始ハ事共ハ世界一般ありハ事ハ意と究め
盡さリと云べし年頃必
斯在りと思定し言出たりあり天表ハ在り有り星
宿共ハ天日ハ分散たり火氣の各一塊あり天表

の氣の剛健ハキクくして極めて寒冽ヒヤシなり。小壓迫オシして收縮シュウシュク
 なるが火の性の隨ヒカひ發暢ハツチャウなりと爲り質有るを以て極
 て遠きも其光輝クワウキどしどし。幽カミ小見ゆるありけり。下シタ
 説トクの如く瑞珠盟約章スヰジュメイヤクシヤウの日の宮と云ふ。謂イハレゆる天極テンキョク
 ありが以ヨリて別ワケの語コトして天日テンニチより別れ放れり。國と云
 義あり事コトも更さらなるが上ウヘの星宿セイシュクを得志トクシと云ふ。火氣カキ
 の義ありを以て所知シラシメたり。儲常モリトシの氣キと云ふ志シと云
 如何イカニと云ふ伎キと云ふ全體サマシの氣キの名あり其氣の物モノ
 迫りて一極ヒトツクありと志シと云ふ其ハ空氣の迫りて動搖ドウガク
 くと風カゼと云て其神名カミナの志シ那ナと負坐フイザありを始ハジメとしてシテ

此氣嵐カキ、荒氣アラキ、虹ニジ、丹氣ニあり例あり。西蕃セイハンの遺イ
 題辭テイジと云ふ陽精ヤウセイ爲日ニチ日ニチ分爲星ホウセイ故其字コトナリ日ニチ下シタ生也ナマレと云
 海ウミの張衛テウエイ日ニチ星セイ日ニチ之餘ノオト也ナリと云ふ。其説コトバ小コト據コトりあり
 可コトし洋西ヤウセイの説コトバハ天表テンヘ小コト在アリり無教ムキウの星宿セイシュクハ皆一
 箇箇コトトの日輪ニチリンあり各オノオノ其外圍ソトノリ小コト土星ドセイ以下シタ及地球チキウハ
 猶我ナラシ一圓イツエン天內テンネンの如ナドき者ありと云ふ。然シカも有アリり可コト
 事コトの狀カタチも所思ソシゆれども我神代ガカミヨの古傳コデンハ然シカも有アリり可コト
 界カイと云ふなりと云ふ古説コトバ無ムれバ諾ダクひ難ガタシし唯天表テイヘ小コト薰クワン
 小コト満マンなり水氣スイキを以て無教ムキウの火球カキウを圍カケりたる其氣キの
 壓迫オシなりと發暢ハツチャウなりと互タガヒ小コト相軋サウケンり合アヒて我一圓イツエン天內テンネンの
 位置チイと定めて終ハジメ古コト易イくざり天柱テンチウと成ナリれりと思オモひ
 足タラシ事コトハ儲五星モリゴセイを地チの所屬ショクありと云ふ證コトバハ天孫降臨テンソンカウリン
 章シヤウ小二神ニカミ遂誅邪神スヰシツジャカミ及草木石類キヤクソクシツルイ皆已平ミタマ託タカ其所不伏者コノコトナラシ
 唯星神ツキカミ杳杳ヤウヤウ背男耳セウオノミミ故加遣倭文神コトバニヤマトコノカミ建葉ケンエフ挺命者トウメイノカミ則服ソクフク故

二神登天也と有り星神と同章第一書小天神遣經
津主神武甕槌神使平定葦原中國時二神曰天有惡神
名曰天津瓊星亦名天香香背男誅先誅此神然後下撥
葦原中國と有て此ハ天津瓊星と云り此を天とい
云へとも地より天表の方小見放りて以て云りあり
が決く五星の中あり火星を司れり神あり天孫の此
國土小降坐むと爲り國平の時小當りて然り星神を
令誅給へりしハ此國土の分判れし其片方あり故ふ
り可ければ此を以て其五星も共小天地と對へり地
より此國土よりハ大ありも猶邊僻の地有り如くふ

り可き事云も更あり然れば次あり如雞子と云物判
割て天日及列星と成れり是天あり列星ハ天表小羅
り天日ハ天の中央ミカ位イて土星木星火星大地金星水
星の六ハ天日の外邊を周旋り後ハ共小地あり月
も亦地球小属て周旋り物あり等ハ地ありあり
右も五星も國土も同ト状ありと同トく保志と云ハ
此國土より瞻望り其體ありも天日の光を
得て明あり事猶天表小在り火星の星ハ相異らざり
ハ故ハ其名と假借て共小保志と云習へり者あり
譬ハ月輪ハ右の五星ハ如く天日ハ属す唯此國土
小附属ふ物ありども地を離れて天の方小遠く在物
あり故ハ万葉三小久堅乃天歸月云々六小天尔座月
讀壯子云々ハ物ありて誅りハ如く其視る象
と以て云此天地未割とハ決て遠く邈あり太古小

△指下も國使使
傳の傳と云事と云
セ方小可

て第四、一書、高天原所生神名曰天御中至尊と有り
時あるが何時より始て此天中オモヒ存在アツクし、其始と
知べし、オモヒ始ハジメり、オモヒ無始ムシハり、以來其天地と成べし物
實ありて天中オモヒ充實ミナクて在り、精真シマと其と主宰シラし給ふ
神カミと相生成オモヒて世と始め給ひ、故ユヘ天御中至尊と申
奉ホウ事コトありて、委オモし、其章シラ就ツクて説ツクり、如ニ其神名の
御ミコハ崇ホウ辞ジふ、非ヒず天中オモヒ充塞ミナクし、氣中キ胎マタいたり
精シマりて、其中ナカ即ツキ神カミの富舎トヨノヤて、其迹物アトノモノ著アツク見ミれ、て虚ソラし
らざり、其オモヒめて、次ツギ成坐ナリり、高皇産靈尊タカミムスヒノミコ神皇産靈尊カミムスヒノミコ
其精シマと身ミ統ツクて天地萬物と成給へり、神等カミナリ坐マり古

事記コトヰ此三柱神者並獨神成坐而隱身也、有り隱身
ハ顯身シマの反サカりて人體ニと云イふ、非ヒず其神靈カミノミコトの物モノ舎ヤ
有アて其信シマ有アと以て身ミとハ云イふ、其オモヒ身ミ即ツキ謂イハゆ、精シマ
る事コトを明アらむ可カし、然シカレバ天中オモヒ天御中至尊アメノミコノミコトの隱
身カミありて其精シマも神カミも亦モ其神一柱カミノヒコトの有アり、其オモヒり天
地チハ出來諸神ユケルカミナリ成坐ナリり、雖モ亦モ其神一柱カミノヒコトの神威カミノイヒふ
り、古書コトヰハ惟神カミナリと云語コトヰの有ア、神中カミノナカ在アり、云義コトヰありて
此神カミの天中オモヒ立タて、其有アり、隨ツて天地チと成給へ
り、由縁ユヰ起タり、神道カミミチと云イふ、此神カミの天中オモヒ立タて、
移ウツり、動ウツり、事コト無ク定成サダナリ、給タふ所以ソノユヰ、依事ヨシあり、孝徳天

皇紀傳の註せらるる如く世の始より打任せて神に申すは此神一柱に限れり事申すも更あり漢籍老子の道之鳥物唯

悦惟惚惚今悦今其中有象悦今惚今其中有物窈今冥今其中有精其精甚真其中有信自百及今其名不忒以

閱表申と有り信字と平田翁の赤縣太古傳の引れり

古書小屈信と用ひたりども説文小申神也白手自持

世と有り古の神字あり河圖括地象及淮南子小正東

陽洲と申土と有ハ神土の義ありと括地象の一木小

信土と有心通用の故あり後小申小示と以て説文小

神天神引出萬物者也以示申聲と有り柳此道の中ふ

り象物と稱し精真と指たり物ハ即上皇大一めて天

地萬物と申出せり最初天神あり故ハ此云と聞元

任せて申と稱せらるハ信ハ然り事也此上皇大一と天

たつと云れたらハ信ハ然り事也此上皇大一と天

御中主尊の當て説れらるハ信ハ然り事也此上皇大一と天

有物混成先天地生の物を此の古傳の合せずと被

北辰星の事と爲るれども古傳の合せずと被

ハ此神一柱の形之大
昔は陰陽の氣之大者
也に云ふも如くあり

○陰陽不分とハ元氣の未分れり一時を云ふは天
地ハ更ふも云ず宇宙ハ在と有り萬物ハ元より此
陰陽の元氣より悉く結ぶり成りたりと雖も猶其交合
無り古を云ふは是即天御中主尊の無始より以來
靈尊神皇產靈尊の未成天中御在坐りりども高皇產
出坐りり間事あり元天際の内ハ至虚なり如
く雖も元氣ハ精と神とを孕胎て水の凹が溜れ
るが如く以て間然無く大彌綸たり是を高天原と
云ふ猶此元氣も亦渾沌たり一物かして素より陰陽
の別有事無きと其本體ハ木にて硬く剛くして能天
體を固成せらるる其大中ありて後小天日の所在より

して大小天表の方小其氣の長伸て動き...
 表の氣も其小醸成て静と相細縵合て始て氣中の火
 と含じ事を得たり是れ於て陰陽の二氣と成て天地
 萬物と生成給ふ高皇產靈尊神皇產靈尊二柱神等の
 神威弥々真盛あり成れりける
猶委しく云りハ
 元氣ハ本體ありて
 精ハ水あり神ハ火
 此ハ至て陰陽の二氣始て分
 始て有りハ有べりける
 天御中主尊の靈威の中隠ありひたり
 事の成始の事譬ハ人の支體の物小觸て智覺と成
 神散去て鬼神あり其半指物小觸て覺り事無と以て火
 物の精神あり事を暖と可し崇神天皇御紀小識性
 の二字を美多麻志此
 と訓とも思ふ可し
 天表の氣ハ健々剛々として天

中小直行小壓迫...
 中カウ直行小壓迫... 其質ハ水ありども火を含...
 陽あり天中の氣ハ天表小長伸り内ハ其直行小壓迫
 あり小遇て右小宛曲... 其質ハ火ありども水を
 含て陰あり如此く陰陽と二小分りてハ有れども
 互々相結バウバウて謂ゆる陰中の陽陽中の陰と云ふ
 意味ハ右の二柱神等の御事を記傳三十五小二柱
 小一柱ハ如く一柱と思へハ二柱ありて其差
 の髣髴一ハ甚深ハ所以有る事ハ有べしと云れ
 たるハ天地古今貫て其尊一ハ
 ハせハ中ハ二柱神等各其剛健の氣と柔順の氣を
 持分て所知食クサ故ハ天孫降臨章ハ高皇產靈尊見其

夫曰是矢則昔我賜天維彦之矢也云云於是取矢還投
下之其矢落下則中天維彦之胸云云中矢立死此世
人所謂反矢可畏之緣也と見え古事記大宜津比賣神
段の神産巢日御祖命令取茲成種と有り其生すと
殺すとの事も持分て預り給ふ陰陽を賣衰と訓り
趣ありとも又思合す可き事多し
言義ハ賣ハ盛退めど同義の言めて古事記ふる伊邪
那美命の御言ハ吾身者成成不成合處一處在と申給
へり如く物を盛容ふ可き空虚あり處有りと云り俗
小地の凹り成れを賣伊流と云も退冲在の義不
りあり
退ハ公家小装束の次第小空し著すを米
良須と云小此字を用い祭家小音の輕重上下
小甲山の字を用いたるあり思合す可し此字説文ハ
象春竹木冤曲而出陰氣猶體其出也此と有と段
玉裁と云者の注ハ難出之類物之出土難也如車
之輻地澁滯と有も亦退字ハ近く備此と單語ハ目を

米の訓ハも盛と同義めて萬景を盛ハ神識ハ達事
必此より先ありハ無く他物を迎入て其用甚切あり
を以て米と云ハ云りめて陰又衰ハ古事記あり伊邪那
女を賣と云ハ其義異あり
岐命の御言ハ我身者成成而成餘處一處在と詔給へ
り如く成餘りて他ハ及ぶ可く豊盈ハ成れりと云ふ
り其時妹神ハ故以吾身成餘處刺塞汝身不成合處而
以爲生成國土奈何と遣合の事を仰せ進ませ給へり
一事も合せて思ふハ其勢ハ狀ハ就ハ物ハ破彫あり
云義ハ近り可ハ山ハ丘と云ハ生類ハ尾と云ハ絲
小緒と云ハ其成餘れハ端方の舵ハ及べると云あり
破と云ハ彫と云ハ此より持たる刀ハ在れ何ハ在れ
物と被ハ刺入て其門を開くより云ハ被刺塞ハ其意

味大の同トを思ふ可し猶陰陽の言義此より未
盡と高皇産靈尊。高ハ勢神皇産靈尊。神ハ嗚と
云説の下出。然れハ衰ハ進ミテ物ハ合ふと性
と見て辨ふ可し。一賣ハ退テ物と圍リテ性とす此即陰陽の二氣ハ
テ人ハ更ふも云ず天地の間ハ在ト一有リテ萬物ハ
至リ迄悉ク其二氣ハ結バリ成テ男女の形體を具
ふ事の起元あり人の男女も此二神の元氣ハ資テ成
レハ其表陰處ハ見リ故ハ八洲起元章ハ雄元之
處雄元之處トモ亦唯ハ元處トモ記レハ第一一書ハ
ハ陰元陽元トモ有リ皆此陰陽二氣ハ象レハ者あり
西蕃ハ此二神と盤古氏ハ傳ハリ三五曆記ハ盤古
氏夫妻陰陽之始也と見え赤縣太古傳ハ引レハる也

○子也子元者太初
之中也天高得之運
并無窮也上得之運
齊無窮人之曰也
統焉有リ此天高ハ
心石の盤古氏トモ
本初ハ同書ハ夫混元
之中是名ハ初見リ

史類篇述異記枕中書等ハ生於大荒莫知其始蓋陶鎔
造化之主天地萬物之祖乃元始天王大元聖母是也
有少妻一其書ハ就テ見リ可シ説文ハ元始也ト有
ハ殷王截江ハ易曰元者氣之始也ト有ハ然ハ事あり
階書ハ引リ道經ハ元始天尊生於大元之先稟自然之
氣冲虚凝遠莫知其極ト有テ元氣ハ此神有テ後ハ成
レハ趣あり又初學記ハ引リ大玄真一經ハ無上無宗
而獨能爲萬物之始故名元始運道一切爲極尊而常處
二清出謂天上故稱天尊也ト有ハ二清ハ陰陽二氣ハ
中ハ處給ふと云ト聞ハ淮南子精神訓ハ古未有天地
之時惟像無形竒二真一芒艾漠閱鴻濛洞莫知其門
其時有二神混生經天營地元始元君莫知其終極
其所止息於是乃別爲陰陽離爲八極剛柔相成萬物
形ハ有ハ文子九守篇ハ老子曰天地未形竒二真一混
而爲一寂然清澄重濁爲地精微爲天離而爲四時分
爲陰陽ト有ハ演ハリ説ハリ此二神ハ決ク陰陽二
神ハ盤古氏夫妻と云ハるハ此等ハ漢上玄家の説
ありハ古傳ハ陰陽八卦ありト云ハ推量の臆説ハ
合テ聞ハ者あり ○未剖不分の剖分ハ字と共ハ和

△欽明天皇御紀
天地剖判之代

△然れども猶波自麻呂
和加流言後平下
訓云事天地開闢
下云事

加礼と訓ハ我と彼と物の二成事あり天地陰
陽の混在たり一也ハ我と彼と二成ベシ物と
ハ無一也天中ハ唯虚一也域あり一故ハ我と云ハ被
と称する未至るより一也此を以て世の始と天
地未割陸陽不分と二句ハ云起るは多者あり藤原
兼良公御説ハ未割者未見上下之位也不分者不見流
行之漸也と宣へるハ如ハ一書ハ天地初判と三處
ハ見え万葉三丁廿七ハ天地之初分時あり有り
判と古くより波自麻流登仗と訓ハ右の未割不分
ありと如く天地ハ陸陽ハ抱ハ事無く一也唯
世の始と云ハ其例あり
○渾沌ハ圓在り天地と成

△列子天瑞篇及

○淮南子要略訓小原
道者虛年六合以
戸一氣天之一空

△孝徳天皇御紀ハ
小首在天自上古
天下而治言ハ麻呂
と麻呂加礼と云
加礼ハ訓ハ又天武天皇
御紀下云事更改諸
族姓作ハ世之姓以
下云事ハ百々混
加須ハ訓ハ御名也
麻呂ハ九の字を云
呂加須又麻呂茶
利又麻呂加礼と訓
此語空三徳助
秋ハ訓ハ少ハ小圓
うれす身を授
洗ハ訓ハ即人容
中ハ訓ハ不ハ通有

ベシ物の未割れずして混成ハ在りと云あり第三一
書ハ天地混成之時と有り口訣ハ謂元氣融疊圓然之
貌と有ハ然ハ事あり此語橙卷十九ハ麻呂加禮ハ
御額髪云々夕霧卷廿二ハ御額髪ハ濡れ麻呂加禮ハ
る云ハ東屋卷丁ハ鹿らりあり東絹共と押麻呂加
て云ハあり有ハ古言あり事云ハ更あり
引ハ孫子ハ渾沌沌沌形圓と有り圓ハ本字圓ハ説
文ハ口部ハ天體也ハ口ハ聲段注ハ呂氏春秋曰何以
説天道之圓也精氣一上一下圓周復襍無所稽留故曰
天道圓許言天體亦謂其體一氣循環無始無終非謂其
形渾圓也と有ハ如ハ三五曆記ハ天地未分渾沌如雞
子と有り渾沌と又泥とも作リ三墳ハ清氣未分濁氣未
沈遊神未靈五色未分中有其物冥冥而性存謂之混沌
混沌為太始と有り又沌と論ハ作リ易緯乾鑿度ハ

淮南子證言訓の同
同云也渾沌爲其
道也或謂之太一

○見よれども
其八神の神所爲
其八神相離曰百
若海等と直りし
知りし其時

太易者未見氣也太初者氣之始也太始者形之始也太
素者質之始也氣形質具而未離故曰渾沌渾沌者言萬
物相渾成而未相離視之不見聽之不聞循之不得故曰
易也○有り猶下○天地混成之時有り所○見
合す右の渾沌字を又傍○牟羅加禮と訓○ハ聚在
天地と成べし物の聚○として在○と云あり圖在ハ
其體を云○當り聚在ハ其用と云○小叶して甚分明
天村雲命天叢雲命ふと又ハ村肝村鳥味村○類○牟
羅比○目ト常○小物○多く集り圖○小群○がふ
多り○
○如雞子○ハ譬あり如此く天地の未成定ら
りり間の形象と其成定○後○りり如何かとも
像○り云○得ま○り神○り神○傳へて又代○語
繼○言繼○ハ其間受○方○再○入て心○留め易と

狀小宣し諭し給ふ事ハ一有れハ種ハ小物ハ比へて
譬とハ成給へり者あり此章の内ハ其同ト物ハ
して譬○別ありハ神○ハ心○ハ傳給へり故あり
然れども其極○る處ハ第一一書ハ狀貌難言と云ハ
如く○有る○今ハ唯其譬ハ就○物と見物を
以て其實物の太体を想像ハ可あり
○白鹽又ハ硝石等を以て其潔白○色ハ諭す
可○然れども右○ニ物の味を以て雪の淡○味ハ
ハ諭し難く縦や他物を以て其淡味ハ當りとも其
隆冬極寒の氣昂○其氷ハ凍レハ鳥ハ狀○ハ
何小○ハ譬ふ○由無○ハ雪ハ唯白○物と云○ハ
外無○ハ雪を諭すハ雪ハ外○未○可○物無○ハ
如○然れハ實ハ彷彿たり物ハ譬へて如此く懇到ハ
皇神等の諭し給へりと雖も天地の成れ後○り其

然れば道理多理めて
 圓満の形貌を以て
 可一の葉二の天を言
 二の天體と云神の
 命一の事と梅李
 二の卵の起るを言
 一の葉五の葉五の歌
 年一の葉六の葉長
 寸圓二の寸六分者
 長三寸圓二寸八分
 並皆圓狀如雞子
 二の百其形貌と聲言
 なる者なり

未成より一始を云事あるが思の外ある事あり多
 り然るを今に如此の有むと心の思及ぶ限り説べざる
 成りて其可畏なりす 如雞子と此下は復述して譬
 猶游魚之浮水上也と云ひ第一書は譬猶海上浮雲無所係と云
 浮蕩と云ひ第二書は譬猶海上浮雲無所係と云
 其譬の四の分なりと以て思ふ如雞子の天御
 中主尊の靈威か資て高皇產靈尊神皇產靈尊二柱成
 出坐り其產靈を以て生成し給へるが古説の如く空
 中の一卵の如き物の成出たるふは有べりりげ精
 氣と神を胎めり我一圓天内を觀象なり 狀貌を云り
 之所思たり 前は天地未剖陰陽不分渾沌と有り物の
 狀貌を云るはて殊更は一物。天中不成

なり事と耳思ふり漢意か惑へり者あり玄家
 小謂ゆ渾天朱意が謂ゆ天鼓と云即此如雞子
 あり物 如此く其渾沌なる事雞子の如くして其大なる
 事宇宙と統と雖も聚がり湊りて天地萬物と凝固
 り成べり微かあり精氣の狀貌も亦如雞子ありが
 故小游魚か比へ浮脂の譬へ浮雲の如くも論し給
 へるは目も見え難き微細の質あるども今現ふ人
 の見觸りし物か依て其言難き狀貌と宣ひ傳給へり
 一物あり右の如雞子と云ふ微細し物二神の產靈
 小賢て次し小相圓りて組圓たり一物か成れり
 あり 夫婦造り合て共小相感くる時其精相圓り
 ありて一物と成て生る事あるが其精の父母の

體中小包藏たる物あり各微細の物の湊り合て
 り精液の狀貌ハ見ゆめれ其未交りざる際ハ此を見
 ぬと爲りハ木を割て花の所在を探り如く雖も
 其子と成り花と成る本質ハ素より其中ハ在り見
 元難く微細の物天地の感を得て其形貌と見ハす
 至れりあり荒西の醫説ハ氣の相會て物と成るハ
 子ハ織毫絲狀の圓長物ありハ天表の氣と天日の氣
 と相合て成り其天表の氣ハ直行し天日の氣ハ
 子を包容り故ハ圓ハ長ハ絲狀の物と成り織毫の如
 物と雖も右の如く形と成す時ハ則中空洞達ハ
 氣液其間ハ穿入流行あり其水火氣土の四元ハ
 融和妙合して一毫織絡と化成し其織絡ハ比續聯綴
 一遂ハ種ハ織絡して以て衆器と造成して人身と成
 身萬物と解盡し見て窮めたり説あり其織毫絲狀
 の圓長物ハ此ハ如鶏子と傳へたり物あり彼ハ理と
 盡して其成れ未ハ知を我ハ天地を造化給ハ神代
 の傳あり故ハ如く奇然レハ石の如鶏子とハ天地
 異なる説ハ有るけり

も陰陽も未分割より太古ハ二神の産靈の御徳ハ
 依て天中謂ゆる高天原と稱り此世の園在て成れり
 中ハ氣形神の三未離して聚在りハ狀貌也又如雞
 子と傳へる事下ハ游魚の譬を再復重ねて云ると以
 て知らる然りと大虚ハ始て然り狀の物の突然ハ
 此出來れり如く云るハ其本末を棄る説共あるハ
 其本末の性ハ依て混成れり物も亦如雞子くあり可
 理あるハ其天體ハ譬ふるハ大ハ外無く其氣
 中ハ在る物ハ小ハ内無く其聚がり園りて天
 地と剖判ベリ物實と成れりハ其中あり者あり
 西蕃の古

此ハ神の久遠之天
 ニハ天の形ハ圓ハ
 ありありと乾の内ハ
 ありありと乾の内ハ
 ありありと乾の内ハ
 ありありと乾の内ハ
 ありありと乾の内ハ
 ありありと乾の内ハ
 ありありと乾の内ハ
 ありありと乾の内ハ
 ありありと乾の内ハ
 ありありと乾の内ハ

説ハ上ノ引キ三五曆記ノ此ノ同ト一ノ渾沌ノ如シ鳥卵ノ地居ニ見ル元ノ天ノ志ヲ載シ渾沌ノ天ノ説ハ天ノ之ノ形ノ狀ノ如シ鳥卵ノ其ノ中ニ天ノ包メ地ヲ外ニ猶シ卵ノ之ノ裏ニ黃圓ノ如シ彈丸ノ故ク曰ク渾沌ノ天ノ言ハ其ノ形ノ體ノ渾ニ然レ也ト云フ今ノ天ノ形ノ如シ鳥卵ノ傳ハリテ百ノ用ヲたシ今ノ通シ證ス唯ニ通シ鑑ス註ス雞ノ子ノ卵ノ也ト有リ如シ雞ノ子ノ周ニ匝シ金ノ色ノ時ノ熱ノ破レ爲シ二ノ段ノ一ノ段ノ在リ上ニ作シ天ノ一ノ段ノ在リ下ニ作シ地ノ被シ二ノ中間ニ生レ梵ノ天ノ名ノ一ノ切ノ衆ノ生ノ祖ノ父ノ作シ天ノ一ノ切ノ有リ無シ命ノ物ノ有リ又シ大安ノ茶ノ天ノ御ノ中ニ主シ尊シ梵ノ天ノ一ノ切ノ有リ小ノ富シ可シ又シ延シ實シ登シ云フ御ノ荒ノ西ノ説ハ太ノ古ノ時ノ小ノ邪ノ迹ノ夫ノ云フ天ノ神ノ無シ始メ云フ御ノ在リ口ノ中ニ一ノ卵ノをシ吐キ出スやリ漸シ生レ長シ此ノ全ノ世ノ界ノ成レルヲ天ノ地ノ日ノ月ノ星ノ辰ノ間ノ人ノ物ノ皆シ此ノ卵ノ中ニ在リ其ノ神ノ像ノ巨ノ大ノ如シ牛ノ卵ノをシ捧グ形ノ如シ卵ノ之ノ云フ何レ也ト此ノ世ノ界ノ成レルヲ始メ時ノ如シ漏レ傳ハ格ハリ○溟ノ滓ノ久ク母ノ理ノ也ト久ク母ノ理ノ説ハ遺ハ者ノ久ク良ク久ク訓ハ儲ク久ク母ノ理ノハニ氣ノ氣ノ圓ノ久ク

母理ハ氣ノ圓ノ大ノ雞ノ子ノ内ニ在リ有リ微シ細シ如シ雞ノ子ノ之ノ云フ狀ノ如シ物ノ之ノ圓ノ聚リてシ狀ノ貌ノ難ク言ハズ一物ノ成レルヲ云フ其ノ混シ成シ狀ノ亦シ如シ雞ノ子ノ有リ事上ノ小ノ已シ説ハ如シ口ノ訣ノ如シ雲ノ掩シ將シ雨ノ之ノ謂ハ有リ然レ事ノ少シ曇シ微シ細シ水ノ氣ノ聚リ凝ル事不レ其ノ極ノ至リ雨ノ成レ如シ宇宙ノ在リ如シ雞ノ子ノ物ノ之ノ聚リてシ天地ノ元ノ因ト成レルヲ狀ノをシ想シ像ノ可シ雲ノ中ニ起リ微シ細シ水ノ氣ノ聚レ理ヲ以テ此ノ如シ其ノ如シ其ノ現レルヲ非シ道斟シ淳シ尊シ豐シ組シ野ノ尊シ及シ豐シ雲ノ野ノ神ノ申ス神ノ名ノ斟シ組シ雲ノ同シ義ノ言ハ其ノ又シ江ノ家ノ點シ阿ノ加ノ久ク良ク久ク志ハ其ノ下ニ云フ又シ江ノ家ノ點シ阿ノ加ノ久ク良ク久ク志ハ

訓る也所謂有事あり然るに此成りて渾沌たる如雞
 子と云物も清陽よりて天と成り重濁よりて地と成
 べり物とを兼たり故も或は上り或は下り爲つ
 らむと其上り時小の天の氣勝て明り下り時小の
 地の氣勝て闇く有り故も如此も傳たれり者あり
 如此く上り下り明く闇く有り間小含まり固
 かり其中より天と成べり物あり時小成り上り
 上り引り圓字に注し引り呂氏春秋に何以説天道之
 圓也精氣一上一下圓月復祿無所暫留故曰天道圓と
 之りと思ふ○含牙の次小狀如葦牙と也第三一書小
 合下可一
 如葦牙之抽出と也第五一書小如葦牙之初生溼中也
 第六一書小若葦牙生於空中と也見元は葦牙是也

△此事の意傳
 上卷八十四丁の
 説なり

り依邪志の氣刺りて一物の圓在る中より清陽の
 物も薄聚て應小昇り口として譬に寶珠の尖なり
 が如く成りたり故も含りて云ふあり万葉十九の梅
 花開有之中
 而數賣流波戀哉許母禮留雪手待等可と詠り考へ
 て含り其中の隱りたるを云事知べし然して今應小形
 するいと爲り
 小云らあり
 右の如く圓在る中も自然小重濁な
 るハ沈み清陽ありハ浮ぶ故小氣刺と云ハ刺ハ立
 小同ト八雲立出雲と云を万葉三ハ八雲刺出雲子等
 と續け古事記日代
 言段小佐泥佐斯佐賀年と續け給へり
 ハ峻嶺立相武ありを以て刺ハ立めて萌騰りと爲り
 氣勢を云事灼一日の發語も赤根刺と云も赤丹刺小

但此書中... 天地混成之時始有神人焉號曰美葦子彦舅尊次天底立尊也

ふて光輝の赤く立と云あり古事記の如葦子彦因萌騰之物と有て母より萌と照應せたりも深き意味有り書状あり呂氏春秋大樂篇小太一出西儀兩儀出陰陽復合合則復離是謂天常萬物所出造於太一化於陰陽萌芽始震凝寒以形と有り通證は母氣機也溟滓而含也芽も共小草木あとの芽むし用いたる此時の委し事實の第三一書小天地混成之時始有神人焉號曰美葦子彦舅尊次國天底立尊と有り可美ハミハ例の美タナ稱と心得むも僻事ヒハ非どれども二神の産靈ウツよ因て此一物を生産ウツし給へり其語後より美稱と定れりウツりりども其起り必右の如くありがれば始有神人

と云りかあは協ふまどりけり葦子彦ハ右の舎子ウツの牙ありか清陽あり物の薄靡ウツき昇りしが大虚の氣小包すれ青く明りり後小成り物して其狀類の能似着て有りり草名と成れると打復して其物を假借して如葦子彦と文小なりハ云りけれ譬を取て御名小負坐り小ハ非事葦子彦一書小説りか如彦舅と葦子彦一書小此云比古尼と有り比古ハ引神義尼ハ連聯ウツく意ありと此より後の神も人も舅と彦と也彦舅と云事ハ成れども打任せて此神一柱小限て稱奉りり語の弘ウツり者あり其始

仁徳天皇五十二年
御紀の精と宇麻と訓
せり

仁徳天皇五十二年
御紀の精と宇麻と訓
せり

所任せし神に申すハ天御中主尊一柱ハ限れり一事
あれども終ハ何れハ神ト申す事ハ成れりトカ如
古ハ引伸の義ありト云ふ予ガ説期
也也説文ハ引伸の義ありト云ふ予ガ説期
者ハ右の倉めり一物の状を云ハ其ハ阿斯訶
備云ハ阿斯ハ明清の義ありを例反して清陽者と
云ハ清ハ清ハ下ハ濁ハ對ハたり事云ハ更ハ
常ハ澄ハ水ハ清水ト云ハ以テ斯ハ清澄ハ義有
ヲ知ハ一訶備ハ氣精めテ此ハ精妙之倉ト云物此ハ
既ハ凝結ハ天日ト爲リテ天先成れハ訶備ハ
凝日ハ義ト包ハ其ハ就ハ天日ハ氣の中ハ最モ精ハ
る物の成れり一事ハ著明ハ所知ナリケレ記ハ譬

ハ葦牙ト記ハ神名ハ阿斯訶備ト書ハハ心
を著ト考ハ不可ト事あり美を備ト呼び備を美ト通ハ
知ハ如ハ精ハ美ト云物ハ事ハ上ハ云ハ説文ハ
萬物之精上ハ爲列星ト見えハ經天文篇ハ張衡曰地有
山嶽精鍾爲星蓋星辰者地之精氣上ハ發乎天而有光耀
者也ト云ハ地ハ精氣ハ星ト成レ説ハ如何ハれども
天ハ精氣ハ鍾ル者上ハ陰陽不分ト有ハ陰陽二氣
古説ハ捨ベリラズと云ハ天地未割ト有ハ物ハ上下ハ剖分ハ
れハ清陽者と云ハ古事記ハ萌騰之物ト有ハ其を
指ハ陽ト云ハ明麗の義あり又短ク明ト云ハ
轉して騰ト云ハ古事記の右文ト平田翁の然ハ
萌元明リト騰ハありト云ハ允ハ當ハリ陽

ハ元易ありハ後ハ偏を加へたり若ク字書ハ
 ハ無レ也且ハ朝日ハ其光輝を容レる象形
 の字あり可キ由赤縣太古傳ハ云ハ麗ハ端麗也佳
 麗也作て共ハ枝良朱久ハ訓リ又煌ハ端麗也佳
 小煌ハ輝也見ハ淮南子ハ氣有漢根清陽者薄靡而
 爲天也有り氣有漢根清陽者薄靡而重
 濁多ハ云ハ三層記ハ清輕者上爲天也有り清
 陽ハ云ハ下ハ濁重と云ハ對ハちハあり上ハ引
 ハ文子九守篇ハ老子曰天地未形竊冥混而爲一
 寂然清澄重濁爲地精微爲天此ハ次ハ精妙之合也有
 小同ハ欽明天皇御紀ハ從昔來未嘗得聞如此微妙之
 法也有り微妙を精妙と同一極易天高明而清地博厚
 而濁謂之太易也有り此高明ハ此清陽爲天也云ハ乾鑿度
 説文地字ハ下ハ元氣初分輕清陽爲天也云ハ此等ハ中ハ
 小一者形變之始清輕者上爲天也云ハ此等ハ中ハ
 ハ真ハ古傳あり唯道○薄靡ハ麗長引あり右ハ牙
 理ハ就ハ云ハ必有ハ唯道○薄靡ハ麗長引あり右ハ牙
 を含めりハ清陽ありハ物ハ漸ハ抽出て上ハハハ

然有つハ地ハ常ハ同ハ頗傾ハ止ガリハ故ハ道
 ハ立ハ外ハ地ハ外圍ハ雲ハ如ハ霞ハ如ハ變鍊ハ
 一故ハ麗長引ハ云ハ一あり古事記ハ訓板舉云
 多那ト有ハ高ハ處ハ長ハ横ハハハ有ハ云ハハ
 ハ此ハ薄靡ハ狀ハ思合ハ可キ者あり又是ハ以テ
 元ハ地ハ旋轉ハ事遠ハ所知ハハ奇ハハ異
 一ハ神代ハ傳説ハハ故ハ仰ハ可ハ尊ハ可ハ通
 小混沌ハ陰陽ハ所合ハ一動一靜ハ爲天爲地故以
 積氣ハ發達ハ訓薄靡ハ云ハ此ハ御紀ハ立淮南子ハ天
 文訓ハ此ハ目ハ祝詞式ハハ謂ハ作ハ萬葉ハハ輕引ハ
 多ハ麗長引ハ意ハ高ハハ同ハハ那ハ長ハ古事記ハ

山下天光成所
以註之
角多那と又相近

志那都比古神と百と御紀の級長津彦命と作々を以
曉り可し比久ハ古ハ説ハ彦舅の比古ハ同ト引レ神
の義あり万葉四ハ赤羅引日ハ母ハ主ハ闍ハ十一ハ朱引朝行
公待苦ト有ト冠辞考ハ赤ハ氣ハ引レ不ハ意ハ赤根
刺ハ同ト常ハ充ハの刺ハ明ハ引レ也云
小同トと云ハ依レ猶考ハ小ハ姓氏録ハ額田部湯
小出ハ明立天御影命と申す神名の明立ハ天の發
語あり柳ハ此時ハ萌騰ハ物ハ依レ天ハ成立ハ
小依ハあり刺ハ立ハ同ト田ハ已ハ合ハ下ハ云
宮祈年祭詞の講義ハ猶ハ太神ハ○為ハ天ハ天日あり天常

立尊比を成坐り其ハ第六一書ハ天地初判有物若葦
牙生於空中因此ハ神號天常立尊次可美葦牙彦舅尊
と百と傳を以知れたり然ハ牙ハ含レ清陽あり
物の薄靡ハ上ハ可美葦牙彦舅尊ハ神成ハ依レ
事あり其物天中ハ空ハ定レ天國ハ最前ハ成レ
事ハ即天常立尊ハ神業ハ依レ故ハ神ハ成レ坐レ次
小ハ違ハ其座坐ハ位置ハ以テ錯綜ハ傳ハあり事
其小云ハ如ハ但亦名ハ天底立尊ハ申レ誰ハも
小ハ非ハ天底ハ天極ハ日ハ之ハ宮ハ儲ハ其ハ天ハ天日
小ハ後ハ天照太神ハ所知ハ省ハ御國ハあり日即天ハあり

乎曰翁說古易乾
 字の女天行乾以自體
 不意に八日と乾天
 の字と違ふなり大書
 の辭也然天字元良
 小作れども天字元良
 言と作れり故小
 有て天字作れり故小
 天字の六日乾字釋
 名天頭心と云々く
 射る者の上と且無
 出り氣と云々なり
 説文且日見一上
 下也と云々なり
 猶下天字と天字成の
 注云々

證ハ四神出生章小生日神號大日靈貴此子光華明彩
 照徹於六合之内云々自當早送于天而授以天上之事
 是時天地相本未遠故以天柱舉於天上也と有ハ日
 云域有て其と所知者故ハ日神とハ申奉此乃其
 と天上と云を以知べ又神武天皇御紀の大御言ハ
 我是日神子孫而向日征虜此逆天道也と有と證と爲
 こ日を天と云事ハ己ハ服部中庸ハ三大考小云ハ
 の天孫ハ古事記ハ天神之御子と有ハ依て訓ハ事ハ
 りハ其日代宮段ハ多迦比迦流比能美古と有ハ始
 て甚多りハ万葉ニ高市皇子尊城上殯宮之時掃本朝
 臣人麻呂作歌の中ハ久堅之天所知流君故ハ云ハ
 有ハ並びて我王者高日所知奴と詠れた右の天地相
 りハ天ハ日ハ高日とハ云ハ右の天地相

本未遠とハ此天日と大地とハ云て常ハ天地と云ハ
 其如くあはとも前ハ天地未割と有ハ天日恒星の
 限を繞て天と云ハ大地五星を合せて地と云ハ
 其差別無ハ如トと思ハ古書ハ例必然ハ右ハ如
 く廣ハ小ハ天地と云と天日と此大地と對ハ
 ハ狭ハ天國と云ハ記傳三ハ古書共を見ハ
 小ハ阿米ハ對ハてハ必久ハ耳云て都知ハ云
 了天神地祇天社國社又神名ハ天某神國某神と對
 い天迹岐志國迹岐志云とあハ申す御名又御紀ハ扇
 天扇國と云ハ雄略天皇御紀古備臣尾代ハ歌ハ阿

廣鏡開卷章第三
一書の諸神... 故不可注... 廣原中國... 天國と河... 自北永歸... 請於... 天國と河... 自北永歸... 請於... 天國と河... 自北永歸... 請於...

每你舉曾根舉或儒阿羅無矩你... 播根舉或底那也作
りおど皆久尔を以て阿米の對へたれは阿米久尔
と云ひて古言あり可ければ古書に天地に有るも然
訓べしなりと云れたるを此考ハ廢て用ひしれど
罪國津罪あり百れは右の廣く阿米都知と云外は狭
く天國と云も何ぞ無くさうじ欽明天皇の大御名
を天國排開廣庭天皇と申せるを思へば其項迄は猶
古意を失はざりしふと
其ハ大地及五星と兼たる
天日の為り」と云者
但此下ハ爲地と有ハ猶都
和と訓べし其も云如く
其天日恒星別此成

所あり

今乃葉三千天原振
見者大王御者長
天原有百天原
林奉て給ハ御
天原有百天原
長と評給ハ御
其ハ九野ハ天地
聖而皇大皇之云
此書ハ天日御子
事ハ金言ハたリ

水り可思 天日を阿米と云言義ハ餘及編、同語句
可ハ其清陽あり物、薄靡き上れり、餘あり其
ハ葦原の如く角母ハ萌騰れり、物あり其を引聯ハ編
成ハ坐り、阿米と云名ハ定まれば、者あり、
天常立尊の常ハ所凝か、其萌騰れり、を取圍ハ天
日ハ成ハ給ハ、登ハ聯ハ連ハ意許ハ凝固ハ
義あり、古事記石長比賣命ハ天神御子之命、雖雪零風
吹恒如石而常石堅石不動坐と見え、万葉一廿九
床等川之水凝ふ見え、如く堅く疑固ナリ、義
あり立ハ欽明天皇御紀ハ建邦神者天地割判之代草

△下から國常立尊の傳見可

本言語之時自天降來造立國家之神也。有る建は同
く家と造り事小建と云類あり。儲常は石。如く地
事あり。此より物の易らぬ事。常は左。如く語。起
れり。あり。文物の易らぬ事。常は左。如く語。起
よて。登許の所凝あり。同意。如く語。起
の。泥土根尊。下。如く語。起
村。二草武左受常。丹毛。常。女。煮。手。同。小。常。字。と
二。小。訓。たり。を。考。ふ。可。一。三。小。常。磐。成。石。室。者。今。毛。安。里
家。礼。騰。住。家。類。入。曾。常。無。里。家。留。○重濁者。八。次。小。洲。壤
と。百。り。此。も。古。と。同。ト。と。者。あり。○重濁者。八。次。小。洲。壤
浮漂。譬。猶。遊。魚。之。浮。水。上。也。と。有。り。其。質。を。云。ふ。り。一。書
小。ハ。浮。膏。も。浮。雲。と。も。譬。たり。儲。此。重。濁。ハ。上。ハ。清。陽
と。有。り。對。め。て。彼。輕。く。清。上。の。物。の。薄。靡。る。と。ハ。異。め。て
此。方。よ。て。ハ。浮。漂。ひ。つ。り。も。其。質。重。き。不。故。小。自然。ハ。其

形貌作り小依々於母斯とハ云めて輕の殼小意相近
き及あり神名小面足尊と申すハ國土の形貌。満足
へり小就て申す御名あり。心を著べき事あり濁を
逆碁流と云ハ土凝と義あり。事溼土煮尊の下小注せ
りを見て知べし。三五曆紀ハ清輕者上爲天濁重者下
る淮南子及文子等ハ重濁と有り。說文地字ハ下小
重濁陸爲地と見え。三墳ハ清氣未升濁氣未沈云々
天高明而清地博厚。第四一書ハ天地初判始有俱生之
神號國常立尊次國狹植尊と有ハ。此時ハ當此ハ傳ハ
るガ。彼牙を舍り。物の根即此重濁ハ物あり。ハ
彼ハ清陽ハ上り。つ。り。も。此。ハ。常。小。同。り。て。自。轉。ハ

皇極經世一
十年御紀中
途淹滯字有
て佐波理登梯
許昌理合と訓
り

中小漸々固りて此國と成れり者あり此ハ謂
動ふる事下小其神の所小註せりを見べし楮右の重
濁の重を加佐那理と訓りハ當り其ハ被輕清の對
あり○淹滯ハ舊く都豆伎氏と訓り然り可し其ハ
淳膏如く或ハ游魚の如くして空中小浮漂ひ乍も
旋轉れり間小其清陽の如くして天と成べし物ハ漸次小
清上り去り小隨ひて重濁れり物の聯聯あり附て圓く
國形を成す狀と云あり淹字を淮南子ハ凝小作れ
共小濁重者下鳥地と云り下小同ト事あり祈年及月
彼濁氣未沈と有り沈も亦其義を以てり
次等祭詞小大海舟滿都氣云長道無間久立
都氣云いと見元又常少も續々と云ひ繼と云も其

義相同ト物を序づり小次と云も續々と云意あり此
下小天先成而地後定と云小意味甚能合り者あり
但右の都豆伎と云べしと都豆伊氏と訓附て有り
伊ハ音便あり正し伎也訓べし又一訓小志豆
美登世理氏と有沈し留り意あり
淹滯の字小抱りて強て訓を作れりあり○為地ハ大
地あり國常立尊の造立給へり事あり上あり為天
ハ天日みし天常立尊の造立給へり對ひたり第六
一書小天地初判有物如葦生於空中因此化神號天
常立尊云々又有物若淳膏生於空中因此化神號國常
立尊と有と鈴屋大入説記傳小此ハ浮膏の如くか
り物と葦牙の如くあり物と木より別小生れり狀小

此事下小使化高
神傳事一辨
なり

云々ハ小異あり傳あり然れども天と地との分はた
り事ハ此傳より殊小著明く聞えたりと云はれり小
心得べし祖亦名を國底立尊と申すハ又御功司ふ
謂りし土星あり事次小諸此地ハ皇御孫尊の所知者
大地萬國を統云々ハ名義ハ都知ハ連聯り續く
意より起りたる言あり其より約りても包むとも
云義を兼ハる可し右の浮膏。如くありし物。滝滯
て約り成りしが其成形より云時ハ地ハ萬物を収
藏て發生つ所ふれハ又包むの義も百とハ云ふり
小堤と云も工と高く幾層も積重ねたるを云を知
説文ハ地元氣初分輕清陽爲天重濁陰爲地万物所

陳列也从土成聲と云ひ也陸也象形と有る其地の
段注地坤道成ハ玄北之門爲天地之根故其字以也
土生物故从土カ其可矣如此者と有る大地の萬
物と包む義有る右ハ説く此ハ都知と云ふ義同
若し入都知ハ傳ふの義とも兼たる可し然ハ天先成
て天日ハ天中ハ位りて常在ハ旋轉る事無きハ其ハ牽
れて大地ハ其外圍を傳ひ旋轉る物ありハあり万
葉ニハ天傳入日刺奴禮七ハ天傳日笠浦ふと發語ハ
古ハ如く人の目ハ日ハ天路を傳ふと云ふ見ゆれ
其實ハ天地ハ天路を傳ふハあり然れハ都知
ハ傳ふの義有ると思ふ可あり然るハ天地ハ相割分
たつ後ハ雖も元混沌なり一物ありハ天日の其處

小居のり自轉の勢小衆て地も亦日、小自轉乍也
日と中心と爲て天傳ひ旋ゆる是即一年あり事國常
立尊の傳小云々如、天日と大地と互小相牽く事譬
吸り如く有り故小天行常百り事あり河圖考
靈曜小地有、西游冬至地上行北而西三萬里夏至地
行南而東亦三萬里春秋二分其中兵地恒動不止而人
不知譬如人在大舟間、牖而坐舟行而不覺也、有り
此、西游昇降ハ右、云々如く大地の一年、小、日、
外圍と一周り爲ると云々發語の天傳日ハ右、在大
舟入り如く又天朝無窮曆小引れ、河圖指地象小
天左旋地右動、云々春秋元命苞小陰右動終而入靈
門地所以右轉者迎天佐其道也、有と宋均法小右動
者動而東也靈門已也陰藏于己也、と見たり、但天左旋
也實ハ左旋あり事古、天傳日と同一事あり、又都知の
然見ゆ、事古、天傳日と同一事あり、又都知の
象形も亦雞子の如く、一、圖、在、乃、乍、も、以、長、く、有、る、

△下小地後定の、
秋推尊と申すを、
と説く云々、
と推の例、

あり可、天孫降臨章第、一書小天據津大來目云、
帶頭推劔、百を纂疏、頭推者劔首如、推と宣ひ神武
天皇御紀歌、小、句、驚、都、都、伊、を、釋、小、頭、推、劔、也、私、記、曰、劔
名其頭曲と見元異志都、都、伊、を、釋、小、石、槌、推、也、私、記、曰、
劔名其頭似石と有、如く推と都知とも都、伊とも云
此大地の形小象なり神代、推の名、ハ成、乃、者
あり此、立復り、又大地の形象を想ひ、思半小
過、小、者、和名、裁、縫、具、小、梶、衣、并、和名、都、知、工、匠、具
都、邊、と、有、る、小、鐵、槌、和名、加、奈、都、知、於、揆、漢、語、以、云、散、伊
問、小、黃、帝、請、天、師、而、問、之、曰、地、之、爲、下、否、乎、岐、伯、曰、地、爲
入、之、下、大、虛、之、中、者、也、帝、曰、憑、乎、岐、伯、曰、大、氣、舉、之、也、と
有、明、張、外、賓、注、小、人、在、地、之、上、天、在、人、之、上、以、人、之、所

○日本書紀傳三

○三十九

△上小其陰陽者薄
麻非而爲天ノ文ニ違フ
文ナリ

見言則上爲天下爲地以天地之全體言則天包地之外
地居天之中故大虛之中者也由此觀之地非天之下地
在大虛之中而不墜者果亦有所依憑否也大氣者大虛
之元氣也万物無不賴之以立故地在大虛之中亦惟元
氣任持之耳と有て地の圓形ナリ
○精妙之合持易
公釋小問謂清陽者爲天阿布久其意如何答是先師之
說也但謂阿布久者未見其由也私案是陽氣清而薄靡
之故風扇易而天先成者也蓋與上清陽文同義也上文
者謂陰陽之氣爲天地之大概下文者謂天地已定之先
後耳と有て如く少く上小ハ天地分判の大概と云ハ
此ハ其成定れる形狀と云々者ナリ通證ハ此の事
を精粹微妙之真氣合持發揚者日月星辰之密象也と

云リ此說大小且一但日月と同トく並べ云ハ僻說不
備淮南子ハ此文の精を清と稱と專ハ作りて一作
搏と見元ナリ清ハ三五曆記ハ清輕者上爲天と
云義小精妙と久波志久多閑那留と訓ハ其精妙ハ上
小精と云々物の形狀と云ハ此物初ハ天中小孫綸
たり一ハ二神の産靈小資て一物と結バハたり其中
より重く濁れり初沈下り分れり清陽あり牙を含みて萌
騰れり其狀の麗ハ妙あり一由あり後ハ日神の生
坐ハ所の文ハ此子光華明彩照徹於六合之内故二神
喜曰吾息雖多未有若靈異之兒と有ハ其明彩ハ此の
精小靈異ハ妙ハ當りて天日成れり一狀ハ日神の

△雄略天皇御紀
舊制記之麻播阿
野千子麻播阿

生坐一容儀と相等しを思ふ可くけり然れ
バ久波志ハ氣麗シキ氣中ノ精粹ヲ美稱ハルル起
りて物ハ麗美ト云ハ其精ノ聚ク依テ成ルル依
ルハ語多ク者あり女ノ容姿麗美ト古事記ハ千尋神
ノ御歌ハ久波志賣遠ト詠セ給ヒ猶神武天皇御紀ハ
細子千足國允恭天皇御紀ハ大御歌ハ波那具波薛佐
區羅能梅涅ト歌ハ給ヒ古事記ハ遠津年魚目目微
比賣ト有テ崇神天皇御紀ハ遠津年魚眼眼妙媛ト作
レタルも麗ト細ト微ト妙ト有リ諸此ノ
妙ハ靈異ノ義あり仲哀天皇御紀ハ如八尺瓊之句

△三山定出之宜比之
出立之妙也

△神出生草子
今昔神記ハ生理體
ル布俱ハ有リ布俱ハ
振ルル也

以曲妙御宇ト有リ曲妙ト多閑ルト訓カケ如ク物ハ
小事ハ名狀ベリ可美ト所ノ有テ云アリ明
天皇御紀ハ微妙ノ字ト久波志伎ト訓リ字ハ佛書
ハ出タル也其訓ハ古言アリ猶万葉一ハ名細吉野
之山ニハ名細之狹岑之島ニハ名細寸稻見乃海之ハ
ト有リ多閑ハ万葉ハ白栲ト栲之穂ト見テ
元ハ栲ノ甚白キハ云知ズ合ハ其清陽アル物ノ薄靡
美ト云リ名ト成レリ合ハ其清陽アル物ノ薄靡
たハ合圓サリあり搏易ハ釋ハ阿布久ト訓テ其説
陽氣清而薄靡之故風扇易而天先成者也ト有カ如ク
昇リ進ム事ノ速キト云アリ言義阿布伎ハ上振アリ
傳ハ其ハ万葉ニハ久堅乃天見如久仰見之ト有リ同
ト意ヲ天之如振放見乍ト詠ハ山吹ト山振ト云ハ

淮南子云此書淮南子之書也
淮南子之書也此書淮南子之書也
淮南子之書也此書淮南子之書也
淮南子之書也此書淮南子之書也

淮南子之書也此書淮南子之書也
淮南子之書也此書淮南子之書也
淮南子之書也此書淮南子之書也
淮南子之書也此書淮南子之書也

古事記小振浪比禮振風比禮と云百七振ハ吹ル例
 と以て思ふ小上方小振と阿布久と云ひ下方小振と
 頌字と書て片振と云ルあり重濁者地成り共神名ト豊香節野尊と申
 すと對へて考ふ可き事あり冠辞方久堅此文と引
 ぬたり小搏を與流と訓ぬるハ義を以る可けれ
 ど也當るぬ事あり纂疏ハ搏撃也清氣上昇如大鵬搏
 扶搖と有れども文ニシテ信奉り難と御説あり搏と淮南子小
 ハ專小作たり易小夫乾其靜也專其動也直是以大生
焉夫坤其靜也翕其動也闢是以廣生焉
純一ト爲る事ト云フ然レハ重濁者地成り
稜ハトハ如クありト云フ一向ハ
 合搏易りト云フ又思ふ可し ○重濁之凝場難ハ

淮南子之書也此書淮南子之書也
淮南子之書也此書淮南子之書也
淮南子之書也此書淮南子之書也
淮南子之書也此書淮南子之書也

先ハ重濁者淹滯而爲地と有る對へたる文あり凝場
 ハ其淹滯ハ物ノ圓形と成る貌と云ルハ其未凝場
 へぞして浮膏云具神威ハ依て凝場ト云フ如く見元初ト太古トハ國常立尊等
 の神聖其中ハ在事ト云ハ更ハ第二一書ト古
 國推地推之時譬猶浮膏而漂蕩と有る推を口訣ハ字
 比志也と有る如く凝場ト可き機ハ有らざら未其時
 小至りたりありハ神名ト泥土煮尊ト土煮尊ト申
 中ハ在りて國常立尊以下ノ神ノ靈威を資けて神功
 を建給へりあり但其中ハ幽と顯トノ差別ハ大小
 在り事次ト云説を以知べし
古事記小國之常立神
次豐雲野神比ニ柱神

亦獨神成坐而隱身也有て次小成坐カ宇比地迹神
須此智迹神以下小神カ然云れカを以知バ
者凝ハ寄聚リ結ハ云リ八洲起元章其子鋒滴
瀝之潮凝成一嶋名之曰礮馭盧鳴有リ凝リ鳴也
云鳴ハ結ニ云文ノ續ヲ考テ曉カ可シ又此凝ニ古
事記ハ累積ツモリ有リ其累積ツモリ聚在ア事ト思及
可ク有リ若テ物ノ凝聚在レ自然カ形體
成ス至リ其即場カ場ハ體聚カ義カ有リ者カ
場字ト纂疏ノ御本ハ場ト作セ給ヘリ淮南子ハ
れハ諸通證ハ合テ擣疑場當連讀難易當章讀難天原
舊讀誤有リ然ル事カ依テ今後ヘリ難ハ天原
易ト云リ友カ有リ易ハ弥達カ義カ物ハ障リ滯リ所

無ト云リ古事記明宮段大御歌ハ須久須久登和賀伊
麻勢婆ト有リ須久同ト難ハ彼カ此方ハ物カ爲
りハ彼方ハ物ノ恒カ容易云フ
然ル此ハ此ノ難ハ彼ハ一物ト有リ母ヲ含テ清陽カ
上リ合擣天ト成ル時運遇レ彼ハ未凝場
の兆耳ハ在ル猶其節ヲ得ル由カ速ハ字音
音訓ハ合ハ有リ古事記朝倉宮段ハ多斯美陀氣多斯
亦波章泥受ト有リ多斯ハ恒カ義カ事カ神賀詞講
義多親ノ下カ故天先成而ハ天日ト本カ在ル
天象ハ既ク成畢云フ今其先成ル天ノ大
綱ト云ベ其ハ天御中主尊高天原ハ神積坐ハ始カ

ウーて天表の形容雞子の如くして其中の天地と
成物バ精陰陽と網綱纏可氣諸神と生坐ベと神
と此三物相混成セ義と説と以知ベ事ハ書一書ハ其御名
古天地未割陰陽不分渾沌如次高皇產靈尊神皇產
雞子有傳ト且ト云リ靈尊ニ柱神成坐テ陰陽の氣の御結有リ所以ハ天地
と成バ一物を天中ハ生産給ハり自然ハ昇降の
機有テ天地と割分ル就テ始テ神有テ俱ニ生坐リ
若テ又其一物も雞子の如く其一物と結バ微細ハ
物も亦雞子の如く有事止ハ己ハ説ハ如ク
此も亦書一書ハ上渾沌如次可美葦牙
雞子渾渾而合也有文下説ハ次ハ可美葦牙

彦舅尊成坐テ其清陽ハ妙精物を引聯ハて
合ア持セ給ハ其天ハ屬テ天常立尊地ハ屬テ國常立
尊ハ俱ニ生坐リ是即天日ハ大地の初ル立尊
の傳ハ此下ハ在リ上ハ二神の傳ハ第一第二第三第六の
一書ハ精妙之合持ト此處ハ上ハ清陽者薄靡而爲天
と有リ傳ハ見合ス可ク猶天日ハ右ハ二神の神威ハ
資テ成ル是即天の真極と定リ此ハ日之別
宮天表ハ別レ聯リ成ル始を思ハ此も亦元運
の任ハ葦牙の如く角牙ハ成ルけハ姓氏録ハ角
疑魂命傳天角ハ利命角疑命と申ス一神ハ可美葦
牙彦舅尊の亦名ハ事神名式ハ神魂子角魂神社と

△上の其清陽者薄
廉の百多那と相近
イ言ひ方合す可
赤名と津彦産靈
中い角と管一維は
の御名かみは生文
子子と我ありて
小川海毛叙子者波
に前

有少々所知れり記傳三小魂を武須毗と訓れたるハ
實小然り事あり 平田翁ハ魂を多麻と訓れ又此を天
載しれり共小誤れり下小 角ハ葦牙の如く萌騰
其義と説いと考合す可 連勝くと云う和名抄ハ五篇云氣炎也炎蓋之初生也
△和名抄土佐國郷名大角を於保都と見えたるを以
思ふ角を都とすなり 鈴屋大人説ハ葦の初生り
と角具年と云故ハ葦角とも云り是葦牙ありと有と
以知べし角ハ古事記ハ都怒と有ハ依て乃と怒と訓
事古言あり仁徳天皇御紀大御歌ハ莞怒瑤破赴以破
能臂詭識と有ハ角草這石と云續けたるハ冠辞考ハ
羅這石と註しれ 又ハ万葉六ハ石網乃又變若反と

△此事下ハ葦牙
傳ハ

△日之小宮の事ハ神
出生章海珠盤約
小ニハ別天ハ事ハ此
下ハ説ハ

有と考ハ石網ハ石羅ありと云れし如く角とも網と
も羅とも通ハし云事ハ本同義ありと先心留む
可 元ハ葦牙の芽がとハ其末の尖りたる状物の
角ハ如く又羅ありと石ハ這ハ懸れたるハ角ハ物
と突巡り状鳥たりハ依りハ名あり万葉十六ハ美麗
物何所不飽兵坂門等之角乃布久禮ハ四具比相ハ計
六ハ詠ハ角乃布久禮 魂ハ薄靡と直ハ内ハ一區の域
ハ男根と云りあり 凝結ハ由りて其凝結ハ物ハ謂ハ衆星ハ
と凝結ハ由りて其凝結ハ物ハ謂ハ衆星ハ
謂ハ天極ハ日之小宮是あり天底立尊と申すハ
其際限迄と慮く造立給ハリ 意の御名あり事第三
一書ハ就て註せり 如ハ天底立尊ハ天常立尊の亦名
と相通ハして説ハ ハ違無けんども底と常と
ハ先達ハ誤あり 網ハ万葉十九 四下ハ天尔波母五

△上其活陽者薄
 廉言百多那相近
 言多り考合可
 言多り考合可
 言多り考合可
 言多り考合可

有少く所知れり記傳三小魂を武須毗と訓れたるハ
 實小然り事あり平田翁ハ魂を多麻と訓れ又此を天
 載しれり共小誤れり下小其義を説いと考合可角ハ葦牙の如く萌騰り
 連騰くと云ハ和名妙小五篇云亂莖也莖蘆之初生也
 和名阿之豆乃と有と引て鈴屋大人説小葦の初生り
 と角具年と云故小葦角とも云り是葦牙ありと有と
 以知べし角ハ古事記小都怒と有ハ依て乃と怒と訓
 事古言あり仁徳天皇御紀大御歌小莞怒瑤破赴以破
 能臂謎誠と有ハ角草這石と云續けたるハ冠辞考小
 羅這石と註れれ又ツタハナイハ万葉六小石網乃又變若反と

△此事下多葦牙
 傳小ナリ

△日之小宮の事ハ神
 出生事其殊相約
 小ニハ一到大小寺ハ如
 下説ハ

有と考小石網ハ石羅ありと云れし如く角とも網と
 も羅とも通ハし云事あり本同義ありを先心留シドむ
 可允小葦角ハ如く又羅あり石小這ハ懸れり角ハ物
 物何所不飽兵坂間等之角乃布久禮ハ四具比相ハ計
 六と詠り角乃布久禮ハ魂魂ハ薄靡と直り内ハ一區の域
 と凝結不由りて其凝結ハ物ハ恒天の謂ゆハ衆星ハて
 謂ゆハ天極ハて日之小宮是あり天底立尊と申すハ
 其際限迄と慮く造立給へり一意の御名あり事第三
 一書小就て註せり如天底立尊ハ天常立尊の亦名
 と相通ハてて説ハ網ハ万葉十九四下天尔波母五
 先達ハ誤あり

百都網波布萬代の國所知年等五百都、奈波布と有
 八衆星の各一群の塊有て今見りぬも網を以て編
 如ふと詠るが予を以て時ハ其成れり始の角凝
 魂命の事ハ當れりあり似古歌而未詳と有と以思ふ
 小石川年足朝臣の古歌を被誦にんハ自詠ハ如く
 成て傳ハれりハあり續紀ハ聖武天皇の大御世を追
 尊して十尋葛藤高知天宮姫尊と称奉給へるハ宮造
 の事ハ係て葛藤と宣ひハハ非ずして天ハ網と云
 古語と取せ給ハりハあり又万葉三十三ハ久堅乃天
 歸月乎網ハ刺我大王者蓋ハ爲有と有ハ月ハ氣脈ハ

△網を角繩
 と云言の約り
 由傳四卷
 四十四下云り

乘て旋りを蓋ハ觀象たるあり但通本ハ網を網ハ作
 天皇御紀ハ忠海前刺宮と申す有り前刺ハ網刺ハ作
 彼室壽御詞ハ築立稚室葛根と申取網繩葛者云と
 也有り葛と刺て結ハる宮号ハ思合せしあり△諸右
 氣脈を假ハ此古遷と訓ハる宇宮ハ大家皆此氣脈ハ
 憑て有と明せりあり素問ハ右の角凝魂命其五百都
 太氣舉之也とハ此事あり
 網を凝ハ結ハハ給へるハ因て阿米と云ふ其ハ網を
 編て網と成す義あり神武天皇御紀ハ皇軍結葛網而
 掩襲と有と以知ハハ阿麻ハ大園ハ彼如雞子の形
 象と云ハあり阿美ハ大聚ハ元氣ハ舍あり義あり
 阿牟ハ右ハ云ハ如ハ阿米ハ大萌ハて萬物を伸生ハ
 神ハ坐ハ依り阿母ハ大覆ハハ外表ハ覆ハ義有り

如此くして阿の鮮明なる意彼方ある義百り麻美牟
米母小園餘真満實身聚群萌盛諸等の聚り園り意
味の有と合せて天象の實を知べき者あり
誅め天地の成始の事と五十連音の合せし熟く説
れ此の説の如くも大の其の依り多事在りを被
れ造化三神天極紫微宮の在りて此天地の成り
状と見ゆふ其の御言の宣ひ頭は給へり由り説
れ相違へれ其の同ト意詞も其取成し別れ成事あり
但取り可き限り此書小引出べし偕同書小天説文
の顛也至高而無上从一大と見元て段注小至高無上
是其大無有二也故从一大於六書爲會意と有と有ハ
予ハ何米ハ大園ありと云ハ意味大ハ似たり網ハ老
子ハ小天網恢々疎而不失と有りハ彼土ハ然り古
説ハ百りて説文小網と網ハ作て庖犧氏所
結繩以田以漁也从門下象网交文と有り段注小口
其上也从象网目文と云ハ又网ハ作て网或如亡と云

然れば本字阿ありと罔ハ作り後ハ網ハ作りあり
り同書小見ゆ又網ハ説文小罔ハ罔也罔ハ罔聲と有
る段注小結繩也此類達云結者罔之大繩高書曰若罔
在網有條而不索と云ハ此も同書小出たり説あり
上件網と云ハ網と云ハ元天地の初り有一語あり
一を後ハ物名と成れり事被葦母の例ハ如し偕其天
表の事小孫り神ハ天壁立命と申す御名姓氏録小
見元祈年祭詞ハ天能壁立極出雲風土記ハ天壁立
廻坐之と有り壁ハ垣と同トハ物の底際を云事ハ
此ハ天表の全と然云ハ加伎の加ハ氣と云ハ伎ハ城
と伎と云ハ如く氣の充塞ハ代の意ハ一て異字ハ徒
の氣海と云ハ粗似ハ語あり
壁と垣と同義ハ事
祝詞講義三卷ハ云ハ

此も右の例に依りて加信の氣聚りて加夜の氣域に
り小等しりり可一を表。形容を仰觀り小寔の壁の
如く垣の如くして其又 別天とハ恒星の懸れり天表
世の際限あり意あり 別天とハ恒星の懸れり天表
の名あり事上小説りガ如く古事記小上件五柱神者
別天神と有ハ別天之神と申す義あり別天とハ天日
の御照り限の常の天小對りて其外小圍りて天を別
ある世界と傳へたり古語あり然りハ右の五柱
神ハ此天地耳ありず天の壁立極小至り迄も漏れ所
無く意小立給ひ定給ひて靈威の行徹り至りざり限
無と大神等小坐て天日の御照り限の天小天神と
申す列の神等とハ此上無く御功の太く高く大座坐

す御事故小總天の神と申奉り意味あり 記傳三小書
多く國之常立神を以て最初の神と云々 此五柱天神
を擧げりハ唯此國土の方小成坐の神を耳申傳へて
天上小成坐りて別あり神と略さたり物あり
云々云々云々云々其ハ此絶の上ありハ古事記の
古事記の最初ハ右の神等を擧たれがとて別ある神
と云々云々云々ハ非者をや予ハ説ハ然らず別字を天
小續けて別天と云ひて其所小成坐て 天先成とハ右
其所を造りて給ひり天神ありハあり 天先成とハ右
の如く洋膏の如くあり物より葦安の如く萌騰りて
天日成り其天日より首字ハ別れり物有て天底迄
至り着て凝結り編り五百都細延たり如く無數の
恒星と成て其即天垣小て天際と成れり謂ゆハ別
天小て其天雨郭小ハ精を孕たり氣の充塞りり其中小

又氣の往來ふ脈有る其を津とも角とも網とも云物
 有る天神の造化し給ふ資あるが悉く備成り故に
 網と云ひ想ひの形象と大國の義めて其天の國土の
 成り多し既に成定れり故に此小天先成ると云
 終めたる者あり 此天地の事を説く予が説か於てハ
 古人と雖も大志を同し天地雲泥
 能はざれば況や外國夷人の云ふ所より天地雲泥
 の差必有るや苦あり偶外國の説を合へるハ彼も同
 小天と載り地を履む者共あり遠く代々の傳説
 も有るが所以古來物百て其名定らざる物事ハ強
 る者あり所以古來物百て其名定らざる物事ハ強
 て窮む物事ハ多かり然れども神名を本とし古傳
 々微しと一として私意を加ふるハ ○地後定ハ此
 非ず後世恐り可く必知入り出來らむ
 國土の定立と本として國底の至り迄立定る事と云

ふあり此先其次等を云べし其ハ被渾沌如雞子溟
 滓而含焉と有て其溟滓てをを含きて其清陽あり
 物ハ薄靡て天と成り本根ハ謂ゆる此國土あるが
 俱生坐り神國常立尊其中ハ在りて天の其處ハ居て
 動き移らざ乍も疆めてはらず自轉ハ後ハ大地也
 其氣ハ牽れて天日の外圍を傳ひ回故に地の古言
 都知と云ハ傳ハ義あり事ハ上小註せざるが如く國
 常ハ同所凝の義あり地ハ其ハ依て漸々小凝固り立
 あり 國底立尊と同神ハ坐せども御功別あり故
 立尊の例の如く國底の事次ハ云べし大地の中心ハ
 在る根國底國と云り底國とい別あり思混ふ可く

今あるハ其初ハ大
 古ハ世古ハ其
 終無ハ事ハ其
 天地之依相之極
 三三三三三三三
 若く此神ハ年ハ
 小合ハ神國立尊の
 日夜ハ神國立尊の

ズ又此を黄泉國と云ふ 此章の國常立尊次國狹植尊
と、甚しき辭説あり 角楯尊活楯尊と稱す
次豊斟淳尊と三柱と並舉て神世七代の世敷合合せ
これらより古事記の國之狹土神と省て角持神活我
神を加へて神世七代の結ばれり何れ宜けむと手
來考り小寔の古事記の方正しく然り可りむと其
御名と漏せり大山津見神野推神因山野持分而生
神と有り下小同ト神名有る依て重複ありむと心得
て省りれり者あり又御紀にも國狹植尊國狹立尊の
と、御名と出されりハ宜しけれり也角楯尊活楯
尊あり申す止事無き神名を除けり也古くより

神世七代と云傳へたる事の然りしが棄てたるが
が故あり此一事を以ても古人の古傳の私無き事な
り知りたるけり今神世七代と云事の重きと就て
考り小國狹植尊ハ正しく國常立尊の亦名あるを古
事記の小紛れと脱し御紀の小誤りて別神と立
るる者ありけり 然れども神名ハ各自の御功ハ
依て定まる者ありハ一神と爲
たれども別神と爲たりむ同ト事ありけりハ少く
難無り可一書ハ一書ハ出たり神名の傳ふと見て
思定む可 國狹植尊と申奉り狹ハ借字とて避の略な
り植ハ地ある事上の爲地と有り下小云り右の如く
見方時の重濁者凝場難に有る其浮脂の如くある物

俗月の既く別れて
有一事ハ別走ル事
生事章ハ難ニ三歳ハ者
ト以テ一若ク月神
の後ハ生坐て其ト所
知者ハ天日ノ成て後日
神ト生坐て并知者也

一塊ハ此國土ハ耳ハ聚ル凝場ト云テ數箇ハ別れ
去テ又別ル國ト成ル其國ハ謂ルハ土星以下の
天日ハ从ハ國ト云ル然ルハ此國ト云テ避テ一塊の
地ハ成ル由の御名あり又國狹立尊ト申ハ國を
避テ造立給ハ意ある事右の說共ト合せて曉カ可
者ありハ佐ト避テ略ありト云ハ此音ハ物の進
佐ハ大神を猿田彦大神ト書レ和名ハ郡名ハ下總國
猿島佐之萬ト有ハ傍例ト音義ト此の事實ハ次第
トハ合ハル國底立尊ト申ハ國底ハ土星ハ此天ト天
際トの限ハ在テ實ハ國底ハ事論無レハ其國造ル
造立給ハ由の御名あり天日の御光の至及ぶ限ある

故ハ大神宮祈年月次等詞ハ皇神能見霽志坐四方國
者天能壁立極國能遠立限ト別天ハ對ハ日天ハ極
を云ルト同ト意あるをハ思合テベリケル但日
天の極ハ云ハ有レ其物を表シ時ハ星即國あり
故ハ國底ト云ハ此大地ハ日天の内あり一國土
ハ有レトモ此を天ト云ハ同ト猶一書
名ハ傳ハ云ベク又祝詞講義ハ説クも見合セテ
曉カ可クハ記傳ハ底ト常ト相通ハ由ハ説ハ平田
翁の黄泉神トハ又月夜見國ハ神ハ云ハ予ハ取
用ハ事あり月ト又地胎ト出タハ一ハ國土ハ
事ト云ハ右の國狹立尊以下の三名ハ日天の内ハ左
ハ五星ハ功坐テ御名あるハ此大地ハ國常立尊日天

の周圍を一^年の回^り旋^る給^ふ事あるが古^く時
敷^を違^へず三百六十日餘の敷^を合^せて日夜の動^き
と成^す事ハ豊國主尊の靈威小依^り其ハ豊^ハ所^倚
ゆ^て動^の義あり豊國と續^{けて}地^の動^の字^の意あり主
ハ名^ヲ知^りて造^成て其主宰^の義あり神名小某主^ト
云^り皆其例あり此ハ豊斟^淳尊^ヲ亦名あるを敷多^ク
ハ中^ハ此御名言義殊^ク分明^クけられ今引出^るを安
くハ下^ハ山^云と待^てく以上公運私運の立定れり起
地^の一^載めして一回^リ爲^すと云^ふ私^運とハ一日^一
夜^の動^とと云^ふあり如^此くし^ハ春^と成^り夏^と成^り秋^と
日^成り冬^と成^りを四^遊昇^降と云^ふあり神典^ハ依^て天
經^と説^者應^ハ此^ハ心^得無^クハ得^有すト^ハ事^共あり

地後成^りハ古^ハ云^ふ如^く葦^舟の如^く萌^騰れり一^物
の跡^ハ遺^り止^まれ浮^脂の如^くあり一^物の此^ハ大地
と一塊^と成^りと爲^すハ素^りの重^ク濁^り一^質あり
けられ凝^場難^クして方^ハ小^ハ避^分れ^て五星^及月^と
成^り諸^後小^ハ締^り固^{まり}て此^ハ國^土ハ全^ク定^り成^れ
と其^ハ天^の先^成れ^りハ甚^ク久^ク遠^ク後^れたり
と云^ふ義^{あり}如^此くして大^地の全^形こ^り成^れけ
れ其^ハ猶^推し^く有^けるを神^世七^代の末^ハ至^りて
漸^ク小^ハ海^陸初^て分^れて今^ハ此^ハ國^土の狀^ハ成^れ
り一^者あり又^ハ其^ハ間^ハ如何^ハ久^ク有^ける傳^無れ

其年序を歴たり事あるは測知り可き非ず三五曆記の古
 昔天地未分渾沌如雞子萬八千歲天地開闢日甲子歲
 甲寅清輕者上為天濁重者下為地盤古在其中神於天
 聖於地萬八千歲天極高地極深有外太古の
 年歴を傳へし書無此日甲子歲甲寅を以て曆元
 とす成す可れども石の萬八千歲○然後神聖生其
 と何万億を歴めけむ知る非ず
 中焉とハ天先成り地後定りて然後小神聖其中生
 坐るが如き文法あるも熟見の上件天地未剖も
 陰陽不分も渾沌如雞子も清陽者薄靡而為天小
 も重濁者淹滯而為地も神聖此も存して此を造成
 給ふと雖も其神體ハ素より隱身と申し奇異小靈
 々イハ大御靈ハ大座坐りければ如何も其形狀

○古事記に書く天地開闢
 之時百神俱生其時
 百神俱生之時天地
 開闢之時百神俱生
 之時天地開闢之時
 百神俱生之時天地
 開闢之時百神俱生

○古事記に書く天地開闢
 之時百神俱生其時
 百神俱生之時天地
 開闢之時百神俱生
 之時天地開闢之時
 百神俱生之時天地
 開闢之時百神俱生

と窺知り奉り可しと雖も其迹天地萬物著見
 ばて蔽ふ可しと以て右の如く記す此の者
 あり古事記ハ始より神名を載せて天地造化の事
 と云故ハ其終ハ右何柱神者獨神成坐而隱身也と
 云ハ其獨神成坐とハ上云ハ如き事ハ物ハ神靈と
 備へて其靈威を施し給ふ由る上ハ其迹萬物著
 見と云ハ是あり御紀ハ神叙神光あり神字を阿夜志
 と訓ハ阿夜ハ内ハ蘊藏ハ文理ハの外ハ著見ハ見ゆ
 りと云ハ思及がして境ハ可し事あり但朱意と云者
 之迹也又鬼神者二氣之良能也あり如く類ハ
 非ず實ハ神聖の其中ハ在り其迹を造化ハ著見ハ

○日本書紀傳三

○四十三

給ふ事ハ己ハ終屋大人の委一論ハ云々然ルガ如
一 通證ハ混沌則未可謂之天地含牙則未可謂之神聖
故天賦地定然後神聖之實可以見矣 神聖の二字迹微
と訓べ一迹ハ氣少ク天中ハ充塞カリテ能物を生
又能物と藏ル所あり所以ハ在所住處ありカ此
と假借ト迹ハ云々あり微ハ氣中ハ寓ル精英
の物めて謂ゆる靈あり事己ハ上ハ天地未剖の傳ハ
註ルガ如ク凡テ此世界ハ至ハ大至ハ廣一と雖
も天御中主尊獨神成坐テ御立一座坐セバ世の界際
と盡一究リテ此神の主宰一給ふ所ハ打任セテ神
申奉ルハ此神ハ耳限リタル事あり故ハ自餘ハ諸

猶外ハ七烟ハ氣
神ハ氣ヲ氣トシテ

神ハ八百万千万ト其數の無量ニモ皆此神ハ別ル
ハ故ハ同トク神トハ云リ其ハ各ハ其物其事ハ限
と幸ハ一坐事上ハ云ト同トクハ故ハ皆神トハ申す
あり 氣字ハ漢音伎吳音祁あり故ハ誰一ハ字音ハ
ザ其一ニと云ハ非ハ氣ハ如ク思ふハ香ト云ル
カ其氣ト云事あり又佐祁ハ眞氣ありハ古言
ありト知バ一借其氣ハ陰陽ハ體あり故ハ素問陰陽
應象大論ハ陰陽者天地之道也万物之綱紀變化之
母生殺之本始神明之府也不可不通乎故物生謂之化
極謂之變陰陽不測謂之神神用無方謂之生ト有リ此
神明之府也注ハ府官府也言所以生殺變化之多端
者以神明居其中也云一易繫辭曰陰陽不測之謂神亦
謂居其中ト有ハ氣中ハ神明の府あり事ト云ハあり

其神明也云々右小謂ゆる精あり老子小其精甚真其
中有申と云々者あり如此くして精即神あり神即
精あり物と成て迹有り其と精と云ひ其精の中は在
て物と成て神と云て其物二有め非あり其精
の一小成て神と差す物有。如く氣中小精有り精中
と靈又魂字と多麻と云
小神此小富りて甚神一々此小依て溢滞り障礙
る所無一然れば神ハ感小同一皇極天皇御紀十二小
便感所遇の感と加麻祓式と訓せし事漢文の字音
小讀と言も音も義も全く同ト事あり**稱徳**天皇御紀
宣命の感聖皇之御世亦至徳と見允万葉十六九小端寸八爲老夫之歌
丹大欲寸九兒等哉カヘケテヲラム而將居廿二十小久爾米具
留阿等利加麻氣利と詠も皆感字の意あり俗言小

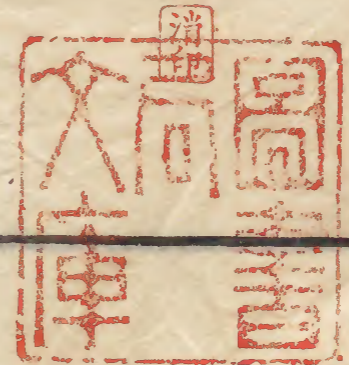
も身の管爲小係つゝ事と也其ハ小感而と云り易
辞ハ山上百澤感君子以處受入と百と柔辞ハ感也
柔上而剛下二氣感應以相與止而說男下女是以草利
質吉也天地感而万物化生聖人感人心而天下和平觀
其所感而天地万物之情可見矣と見え書也至誠感
神と云る皆感通の義あり子華子ハ古也至人操幾
而鉤深與天通心清明在躬與帝同功是以進爲而在上
則至誠之感流通而無礙以上行而際澤以下行而極憂
以旁行而塞於心表不言而後化不召而致證以其所以
感之内也と有て神と感ハ右小註る如く何所迄也至
る可き限ハ行至り通る事あり其極ハ物の限ハ
一有れば其中と構とハ云う家ハ在れ城ハ有れ
一圍あると一構と云ひ又物ハ推考ハ事と俗ハ構
と云ひ人を御して令す語ハ構而ると云る也世の

限りと神の構へて万物を作成し給ふ義を取れ
る者あり 希ふも天地網縵万物化醇男女措精万物化
百り此男ハ天陽地陰の氣をハ相構へて万物と
精ハ地陰の精ハ男ハの婚ハ如く相構へて万物と
化ハ生ハ由ハあるが構ハ如此くして神ハ天地の間ハ弥
造ハ合ハふ事ハ小云々あり
給ハて万物の比ハ非ハず妙ハ小奇ハく尊ハく坐ハを以て其語
を借用ひして下ハ對ハへて上ハと云ひ被官ハ對ハへて長官
と上ハと叫ハびて尊ハ極ハと成ハりや嗔ハと云も物を受ハぬ
釀ハ成ハて身を養ハふ義ハ龍ハトハ鳥ハハ天地ハ小感通ハ
占合ハりハ徳ハを以ハの名ハあり鴨ハ雌雄相愛ハくハ心ハの
深ハきの名ハあり可ハくハ何れハ古ハの神ハと云ふ語を轉

あり用ひたる者あり然れハ上ハ引ハ如く説文ハ
申ハ作りてハ白ハ自持也ハ有ハ七ハ息ハくハ非ハれハも猶
申ハ字ハあり可ハく申ハの日ハ天日其豎畫ハのハ同書ハ小上
下通也ハ有ハれハ會意ハの字ハありが然ハして申ハ成ハり
上ハ天日の光輝ハの上下ハ照徹ハれハ象形ハの字ハあり可
し天中ハも高天原ハとも云ハて皇神等ハの神留坐ハす其所
日ハ天日を本ハとして天極ハの際限ハ小及ハふ事ハありハか
古ハの申字ハのハ上下通也ハと云ハるハ感通ハの義ハあり
易觀ハの象傳ハ小觀ハ天之神道ハ而四時ハ下ハ成ハ聖人ハ以ハ神道
設ハ教ハ而天下服矣ハと有ハ天日ハの運行ハを以て神道ハと云
るハありハ史記ハ封禪書ハ小東北ハ神明ハ之舍ハと有ハ張ハ注ハ小
神明ハ日也日出ハ東北ハ舍曰ハ陽谷ハと云ハひハ礼ハ郊ハ特ハ牲ハ小交ハ於
且明ハと有ハ鄭注ハ小且讀ハ鳥神ハと見ハ元ハ莊子ハ大宗師ハ小有

且宅無情死と有と通雅い且宅神宅也と云々を見て
日と神と云事を知ぐ易い氣之伸者爲神屈者爲鬼
と云い説文の神天神引出万物神聖生其中と云文ハ
三五曆記の依せ給へりふれども神其中成礼利之
訓べくして本より古傳あり孝徳天皇御紀の唯神カナラ謂
神道亦自と記せ給へり唯字ハ尚書の唯精唯一と
有神道也と記せ給へり唯神耳有て他は道無いと
百の依て書せ給へりふて唯神耳有て他は道無いと
云義あり事同御紀の又隨カハナカ在天神と書せ給へり
以知べしあり又其を万葉十三カハナカ丁の神在隨と記さ
れりふれどもを合せし言義と思ふ其ハ神中在と云
事ありけり中臣本系帳の中良布留人と有り如く天

地の立ちも万物の成れも神其中小在して然爲給
ふの依て古より今も至る迄其信有て違はざり如く
人身も受行ふ神道も然りて神道小隨ハ亦自然小
神道其中小在りと云事あり論語小祿在其中と云
也圓仁在其中と意味似たり事小此を行ハ板亦
其中小在て行ハるしを云あり猶神道の事ハ孝徳天
皇御紀の云べく唯神の事釋紀の私記曰師説生其中
ハ祝詞講義の己の註せり己上者序文と有事ありども此章首も註せり如く
天地陰陽剖分の古傳を一小統括たる文ありを漢籍
も然る古説の有上ハ更も別小新意を加へて書紀
とせ給ふ可小非れハ其ハ委仕とせ給へり故小序文



あり別ある物の如く思ひ取れり一あり此御紀の初
 章ハ天地造化の起原と記さし給へり所あり此正書
 ハ神名の出たりハ國常立事ハ始れりハ此より以下
 ハ神名の根據ハ古傳と載れ其以前ハ事ハ古説と
 以記して神名ハ漏れ給へり神此ハ在りて其始
 成給へり故ハ神聖^在中と云て一書ハ^在其主
 宰の神ハ在り由を曉し給へり料あり斯在ハ古
 小説ハ如く古事記ハ傳ハれハ趣ハ其義を明し
 此ハ然耳相背けり事ハ亦ハ無^レ者ありをや予
 以云時ハ此奇ハ小事實^ハ簡場^ハハ^レて天地の大綱

明治七年七月五日校合

菅野文

